

## 第53回 姫路文化賞

### 同人誌「播<sup>ばん</sup>火<sup>か</sup>」（文学）



『播火』の第100号を送っていただき、あらためて、この雑誌の底力を感じたことであった。

播州には有力な同人雑誌がいくつもあって、互いに切磋琢磨しているけれど、およそ『播火』ほど、多彩な世界を繰り広げている雑誌は他にない。季刊であって、平成元年（1989年）創刊から、わずか28年で区切りの100号に達したということは、並大抵のエネルギーではない。しかも毎号が200頁を超える大冊なのである。

編集長をつとめてこられた柳谷郁子氏の活躍は言うまでもない。この雑誌にかける情熱は文学愛そのものであり、率先して『月柱』をはじめ多数の著書も刊行してこられた。近著『諏訪育ち』には、氏の文学を育んだ原点が語られている。

中近東アジアを舞台とした作品を精力的に書きつづける山田正春、知的冒険小説の松永剛、巧みに日常を切り取り描く木下健一、感動的な『川は流れて』の北山眞佐子、時代小説を自在に描く菅谷奎太郎、抒情的作風の松本順子、そして哲学的思弁を追究しつづけ、『種の記憶』にその一端を結実させた鬼才・諸井学……。

多士済々の『播火』を、次号から、脚本・小説に健筆をふるう大塚高誉が編集長として牽引するという。ますます楽しみである。

森本 穂（『文芸日女道』会員）

#### 活動歴

1989年 創刊

1993年 10号・記念特集・記念競作集「道」

姫路市芸術文化賞年度賞受賞

1995年 17号～44号 異色文化論「播州才彩」連載（88名収録）

1996年 20号記念同人競作集「恋」

1998年 30号記念同人競作集「月」

1999年 播磨文芸祭「現代播磨の作家たち」に展示

2000年 直木賞受賞・車谷長吉を囲む座談会「作家と故郷を結ぶ端緒をつくる」

2001年 40号記念同人競作集「顔」

2003年 50号・創立15周年記念出版

小型本「約束」出版、「異色文化論－播州才彩」出版

2006年 60号記念同人競作集「雲の記憶」、小型本出版

2008年 70号記念同人競作集「増殖」、小型本出版

2011年 80号記念同人競作集「放熱」、小型本出版

2014年 90号記念同人競作集「青炎」、小型本出版

2017年 100号記念特集・記念同人競作集「恋いして」B5版全国出版（ほうず書籍）

## 第53回 姫路文化賞

### むらい ひろあき 村井 弘昌（伝統工芸・播磨藍）



村井さんと出会ってはや十数年になります。村井さんが淡路から運んだ土で藍床を完成させて程経ぬ頃であった。何を話したのか憶えていないが、一人の青年の強い存在感と不思議な感動が残った。

縁あってそれ以降、何度か話をする中で、村井さんが会話の途中で黙り込む場面がしばしばあるのに気がついた。それは最も正確に表現するためのことば探しの沈黙なのである。ここまで自分に対しまた他者に対し誠実な人は稀である。

現在、彼は一町五反の田に藍を育てている。苗を手植えし、夏場の水遣り、炎天下の草取り。想像するだけでひるんでしまう。さらに難しい「すくも」造り。根気と誠意と探究心。どれ一つ欠いても質の高い染料としての「すくも」は出来ない。

今、藍農家は減少の一途を辿っているのが現実である。そうした中、村井さんの存在はますます貴重となるでしょう。

長い伝統を持ち、今の私達の美意識にまで深い影響を与えた藍の蒼・青・あお。空の群青となり、薫風のあおとなる。ご活躍期待します。

得平秀昌（養蜂家）

#### 略 歴

- 1969年（昭和44年） 兵庫県西脇市生まれ。
- 1993年（平成5年） 大阪芸術大学芸術学部写真学科卒業。家業を手伝いながら、写真の道を志す。
- 1995年（平成7年） タイ取材中に山岳民族の布に触れ、天然染織に興味を持つ。
- 1998年（平成10年） 偶然手に取った雑誌で日本の藍染を知り、心奪われる。  
その足で徳島へ渡り、藍染の仕事に就く。さらにはこの藍色がどうして生まれるのか知りたくなり、江戸時代から続く阿波藍の栽培・製造方法を習う。
- 2000年（平成12年） 生まれ故郷である西脇へもどり藍作を始める。屋号を播磨藍とする
- 2014年（平成26年） 『播磨の青』展 ギャラリー一結
- 2015年（平成27年） 第4回 KOBE ART AWARD 地域賞（神戸文化支援基金）受賞

# 文化功労賞

こさか ふみゆき

小坂 文之（俳句）



大小坂文之氏は昭和35年頃から俳句の創作を始め、師・森澄雄の薫陶を受けて、現代俳句の創作に意欲的に取り組んで力作を発表するとともに、多くの講座の講師や文化事業の推進に尽力し、力量ある後進を排出した。  
その功績は多大である。

楠田立身（歌人）

## 活 動 歴

1942年 姫路市生まれ

1960年 現代俳句を始め、新聞の俳壇に投句など。

高校の国語教師・西鳳城氏（七曜同人）に伝統俳句を勧められるも反発し、難解俳句を気に入り、赤尾兜子の「渦」、神生彩史の「白亜」、岩谷孔雀の「極光」などに投句

1964年 「寒雷」の編集長：森澄雄氏来姫。手柄山図書館での森澄雄歓迎句会に出席  
姫路西高校の山崎為人氏の家での句会に参加し「寒雷」に参加

1970年 森澄雄主宰の「杉」が創刊され参加

1972年 「寒雷」退会

1973年 「杉」同人

1977年 現代俳句協会会員

1995年 妻：佐紀子と共に「草の香俳句会」を立ち上げる。

1997年 第一句集『華映（くわえい）』出版  
第26回「杉」賞を受賞

2000年 書写山麓公園内に森澄雄句碑建立に尽力

2003年 兵庫県知事より「こうのとり賞」受賞

2009年 兵庫県知事より「自治賞」受賞

## 役 職 等

好古園俳句の選者。西播磨ふるさと芸術振興事業俳句部門実行委員。角川学芸出版の「俳句添削講座」の講師。姫路城北公民館「俳句講座」講師。たつの市揖保公民館「俳句講座」講師。西播俳人協会顧問。毎日新聞はりま文芸「俳句」選者。

## 第35回 黒川録朗賞

かわはら ゆうぞう

川原 有造（ガラス工芸）



川原さんのことは、上郡にグラススタジオ「刻」を設立した時に、大きく新聞で取り上げられ、その存在を知りました。

若くして独立し、ガラス工房を持つという事は大変なことです。それを難なくやり遂げている川原さんは前へ前へと進んでいます。

初めてお会いしたのは、山陽百貨店での特集展の時でした。川原さんの印象はこんなに細い体から大きな作品ができるもんだなぁと感心しておりました。それからほどなくして「ギャラリーと一く」にお出でくださり、お付き合いが始まりました。

作品から来る繊細な印象とは違ってとても気さくな方だと感じました。作品についての考え方もまたしっかりしたものがおありでした。

経歴を見ますと若干25歳の時、2003年に兵庫県知事賞を受けその後、毎年のように工芸展で目覚ましく活躍されています。

これからも沢山良い作品を作って頂き、後世の人たちの道しるべとなって頂きたいと思います。

大橋ひろ美（ギャラリーと一く）

### 略 歴

- 1978年 香川県生まれ
- 1998年 赤澤清和氏に師事
- 2001年 播磨ガラス工房
- 2003年 テーブルウェア大賞／東京ドーム  
国際芸術総合展 in 明石 兵庫県知事賞受賞
- 2004年 工芸都市高岡クラフト展／富山
- 2005年 Glass Studio「刻」設立
- 2007年 個展（山陽百貨店／兵庫）〔2008 以後隔年開催〕
- 2008年 第37回日本伝統工芸近畿展 新人奨励賞受賞  
個展（天満屋広島八丁堀店・アルパーク店／広島）
- 2010年 第57回日本伝統工芸展 入選  
国民文化祭・おかやま美術展「工芸」 岡山県知事賞受賞
- 2011年 個展（天満屋岡山店／岡山）〔以後隔年開催〕  
企画展（西武池袋店／東京）〔2015 まで毎年開催〕
- 2012年 第50回兵庫工芸展 奨励賞受賞  
個展（ミリオンアート／東京）〔2014' 15 開催〕
- 2013年 第24回伝統工芸諸工芸部会展 入選  
第51回兵庫工芸展 兵庫県芸術文化協会賞受賞  
個展（松坂屋名古屋店／愛知）〔以後毎年開催〕
- 2014年 第52回兵庫工芸展 神戸市長賞受賞  
個展（京阪百貨店守口店／大阪）
- 2015年 個展（大丸神戸店／兵庫）

## 第35回 黒川録朗賞

ききょう はやみつ みつし

桔梗 隼光（光史）（刀工）



現代において日本刀を作ることは、様々な困難や矛盾を抱えることになる。それは、武器として生まれてきた器ゆえの宿命のようなものだ。しかし、桔梗隼光は、その事を乗り越え、自分の気持ちに正直に日本刀を作り続けている。

大学で彫刻を学び、卒業後はサラリーマンとして働いている時に、偶然テレビで作刀場面をみて興味が湧き、実際に日本刀を作っている現場を見学し、その技に一気に引き込まれた。その感動が刀づくりの動機になっている。それには「なぜ」という不思議を感じ、そこに挑戦していくという、人間が忘れてはならない普遍的な態度が見て取れる。

2000年に岡山在住の師である横井崇光刀匠の下で修業を重ね、2005年独立後、京都で鍛刀場を開き、その後、2010年に地元である相生市の「羅漢の里」で鍛刀場を開設し現在に至る。

2012年には、第7回お守り刀展覧会で、刀身の部で「テレビせとうち賞」に輝くなど、数々のコンクールに出品している。また工房を開放し、小刀づくりの体験教室も定期的で開催し、鍛冶技術の面白さの普及にも努めるほか、多種多様な作家の方々と交流し、作品発表も行っている。その様に伝統ある日本刀製作に邁進しながらも、得た技術によって、社会と交わり、独自のスタイルを築いている。そして日本刀の世界の中にある大切なものを感じ取り、自分の中で咀嚼し、自然の法則に従い、調和的な美を表現しようとする刀鍛冶である。

明珍 裕介（刀工）

### 略 歴

- 1973年 相生市生まれ
- 1992年 兵庫県立龍野高等学校卒業
- 1997年 和歌山大学教育学部美術学科卒業
- 2000年 岡山 横井崇光師に入門
- 2004年 平成十六年度美術刀剣刀匠技術保存研修会修了
- 2005年 京都にて工房をひらき独立
- 2007年 新作名刀展 小脇差・短刀・剣の部入選
- 2009年 第4回お守り刀展覧会 刀身の部入選
- 2010年 兵庫県相生市「羅漢の里」にて工房を開く。
- 2011年 第2回新作日本刀刀職技術展覧会入選
- 2012年 第7回お守り刀展覧会 刀身の部「テレビせとうち賞」
- 2013年 第8回お守り刀展覧会 刀身の部入選
- 2015年 第10回お守り刀展覧会 刀身の部入選
- 2017年 第12回お守り刀展覧会 刀身の部入選
- 京都府 南禅寺 仏像修復
- 2016年 神戸市 相楽園 国指定重要文化財 舟屋形 漆塗
- 奈良県 春日大社 漆塗

## 第35回 黒川録朗賞



くにみ まさのすけ

國見 政之輔 (邦楽)

内弟子時代に下積み、基礎をしっかりと学び、歌舞伎の下座尺八時代に多様な経験を積み重ねられました。

北海道から鹿児島まで日本全国に足を運び、古老などから直接話を聞き、先人の墓所を調査、献香献笛して、各地の古い尺八曲、楽器、人物・歴史に関する資料の収集に尽力されています。

また、「尺八古典本曲断片」の会を大阪にて開催。若手尺八奏者と共に、テーマを決めて虚無僧たちが吹き伝えた伝統的な尺八曲「古典本曲」のルーツと土地毎の変化や伝播の研究をシリーズ

化し、業界でも好評を博しています。

琴古流尺八竹友社の師範。これまでに、國見政之輔尺八リサイタルを3回開催。NHK-FM「邦楽のひととき」にも出演し、ウズベキスタン大統領主催の国際音楽祭「シャルク・タロラナル」にも招聘されるなど活躍中です。

小寺一登代（日本舞踊家）

### プロフィール

琴古流竹友社師範。

琴古流尺八竹友社三世宗家川瀬順輔、その子息庸輔両師に師事。

地唄・箏曲などの三曲尺八、琴古流尺八本曲を中心に、根笹派錦風流伝曲などの尺八古典本曲を学ぶ。

また、近年は伝承の途絶えかけた虚無僧音楽を求めて各地の古老を訪ね、先人遺愛の古管尺八や一節切尺八など、楽器や曲目についても研究を重ねている。

「國見政之輔尺八リサイタル」ほかの自主公演をはじめ、学校公演・賛助出演など多数。

1997年正月、新春花形歌舞伎（浅草公会堂）での五代目坂東八十助（十代目三津五郎）丈の「黒手組曲輪達引」以降、歌舞伎下座音楽尺八方を多数務める。

# 第35回 黒川録朗賞



すがい ひでかず  
須飼 秀和（洋画）

飛び込みでギャラリー島田に作品をもってきて、即座に初個展を決めました。蒼い空が象徴する懐かしくも美しい風景に惹かれたからですが、郷愁あふれる情景を上手に描いているのではなく、急速に失われようとしている「心の故郷」や人々の優しさや温もり、それを若い感性で蒼い空が象徴するように、一途で真直ぐな目で見つめ、そこに混じりけのない純粹さと誠実さがストレートに伝わりました。現代に生きる人が懐かしむのではなく、須飼自身がその時代にそこいるという愛情を感じさせたのです。

須飼秀和のデビューのころから、私はこのジャンルでは谷内六郎（1921－1981）、原田泰治（1940－）が知られるが、須飼秀和は、彼らを超えていく可能性を秘めていると予測し語ってきましたが、その仕事は、それを裏付ける目覚ましいものです。そして須飼の世界を劇的に拮げて鍛え上げたのは毎日新聞夕刊での全205回にわたる長期連載挿絵「帰りたいー私だけの故郷」（2008年－2012年）です。多彩な顔ぶれの作家たちが、自らの故郷への思いや、幼少時代の思い出を語り、そこに絵を添えるのです。知り合いの編集者から打診があり須飼に決まったのですが、4年にわたるとは。照る日、曇る日、雨の日、雪の日、夜、朝。祭。子供たち。何でもあり。この企画は文と絵が同等なのです。大切な作家たちの故郷への思いを毎週、受け止める。描くことを超えて須飼を人間的にも成長させる厳しい仕事です。明石市立博物館の企画で須飼秀和展（2009年）。画集『いつか見た蒼い空』（シーズプランニング）。岩波書店『私だけの故郷ー作家たちの原風景』（2013年）。『うなぎのうーちゃん』（福音館書店）。雑誌、新聞の連載も続きます。来年はBB プラザ美術館（灘区）で須飼秀和展が計画されています。明石も BB も企画個展としては最年少画家です。取材、制作で多忙ななかでも綿密な取材と精緻なタッチを無限に繰り返し、俯瞰と微細とを納得いくまで追求する大作にも取り組んでいる。イラストでも挿絵といった範疇を超えた表現を求道者のように歩む。

島田 誠（ギャラリー島田）

## 略 歴

- 1977年8月 明石市生まれ
- 1998年 バイクで西日本を回る。  
そこで出会った人の温かさや風景に触れ、郷愁をテーマに絵を描く
- 2004年4月 京都造形芸術大学部美術工芸学科洋画コース卒業
- 2004年12月 初個展 ギャラリー島田（神戸）
- 2006年4月 神戸新聞夕刊、毎月第1土曜日「やわらかな情景」絵・文連載
- 2006年10月 岩波ジュニア新書『長崎 南蛮文化のまちを歩こう』
- 2007年3月 京阪神エルマガジン社「西の旅」連載中
- 2008年4月 毎日新聞夕刊毎週木曜日「帰りたい」挿絵、連載
- 11月 岩波ジュニア新書『地元学をはじめよう』表紙絵
- 2009年7月 明石市立文化博物館「いつか見た蒼い空 須飼秀和展」
- 2010年4月 揖保郡太子町立図書館パンフレット表紙絵
- 2011年5月 大場和昭・須飼秀和・東影智裕三人展（ギャラリールネッサンススクエア姫路）
- 2013年11月 週刊朝日・さだまさし小説『ラストレター』挿絵掲載スタート  
兵庫県芸術奨励賞受賞
- 2014年6月 福音館書店・科学書『うなぎのうーちゃんだいぼうけん』（初絵本）出版
- 2015年4月 宝島社よりCDブック『懐かしいあの頃の歌』表紙絵
- 2016年11月 さだまさし小説『ラストレター』表紙絵
- 2017年4月 全国農協観光協会「ふれあい」表紙・裏表紙文章掲載  
伝統芸能や地域の暮らしで全国取材中

## 第35回 黒川録朗賞

どい      みか  
土井   美佳   （音楽）



細身で色白で、女神のように美しい彼女ですが、実は芯に鉄が含まれているかのような強さがあり、自分の決めた事に脇目もふらずまっすぐに邁進する人です。

音楽の道に進むと決めてからは指や身体を痛めるほどに練習したり、単身イギリスまでレッスンを受けに行ったり、数々のコンクールに挑戦して入賞すること多数、その男っぽい決断と行動力には脱帽するばかりです。

いつの間にかクラシックだけでなく、タンゴやジャズの分野にまで手を広げ、そのセンスの良さにも特筆すべきものがあります。

今はフリーの演奏家として、ソロやデュオのリサイタルをはじめ、テレビ出演やいろいろなコンサートにゲストとして活動の幅も大きく広げて、私達ファンも度々彼女の演奏を楽しませてもらっています。

片や、私達の姫路市ヴァイオリン教室の講師としても、ある時は優しく、ある時は厳しく子供達にヴァイオリンの指導をしてくれています。

今後もますます活動の場を広げて、地域の音楽文化の振興と発展に大きく貢献していただきたいと心より願うものです。

藤井たみ子（姫路市ヴァイオリン教室講師）

### プロフィール

大阪音楽大学卒業後、渡英（英国王立音楽院）し研鑽  
全日本芸術コンクール第1位、日本演奏家コンクール、大阪国際音楽コンクール、神戸国際学生音楽コンクールにて優秀賞、奨励賞など受賞多数

奨学生として国際アカデミーを受講し、ロンドンやウィーンにて演奏会に出演  
関西を中心に推薦リサイタルや演奏会に出演し、ソロやプロオーケストラなどで活動  
NHK「ニュース発神戸」番組内「ジャズライブ K0BE」に出演や神戸ジャズストリートに出演など、ジャンルを超えても活動

大阪音楽大学付属音楽院、神戸山手女子高校弦楽アンサンブル各講師  
ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団登録団員   神戸音楽家協会会員